2023. May Vol.60

C&C

Care Communication

ケア&コミュニケーション

DENTAL REPORT

患者の視点に立つ診療と
情報提供に徹し、
親子継承で未来を築く

医療法人 志萠会
原歯科 理事長
原 正幸 先生

原歯科 院長
原 幸弘 先生

P01-06

INSIDE REPORT

歯を残す丁寧な治療と
訪問診療に取り組み、
家族の絆で患者の健康を守る

尾形歯科医院 院長
尾形 文隆 先生

尾形歯科医院 副院長
尾形 晴香 先生

P07-12

DOCTOR'S TALK

マイクロスコープも活用し、
夫婦で地域医療の向上に
力を尽くす

ちば歯科医院 院長
千葉 由範 先生

ちば歯科医院 副院長
千葉 順子 先生

P13-16

THE FRONT LINE

人の縁を大切に
マウスピースやレーザーを
治療に駆使

Nd:YAGレーザー誌上講座

医療法人ひのき歯科 理事長
内田 宏城 先生

P17-22

SASAKI
https://www.sasaki-kk.co.jp

原歯科

スウェーデンの岩石線画を
模したモニュメント

船をイメージして設計したという建物

患者の視点に立つ診療と情報提供に徹し、親子継承で未来を築く

愛知県長久手市にある「原歯科」は「患者第一主義」の診療に徹してきた。開業から44年経ち、親子継承が進む今とこれからについて、理事長と院長のお二人に伺った。

医療法人 志萠会
原歯科

理事長　原 正幸 先生
院長　原 幸弘 先生

患者第一主義の診療で多数の信頼を得て成長

「原歯科」がある長久手市は、名古屋市のベッドタウンとして発展した地域だ。原正幸理事長が開業したのは1979年。現在地に近い場所での開業だった。

「当時は駅もなく、農地を転用した住宅地の開発が始まったばかり。歯科医院の周囲に家はなく、人通りもまばらでした。銀行の方から開業を考え直すように助言されたくらい立地は悪かったのです」（正幸理事長）

それでも踏み切ったのは、限られた資金で開業できる場所だったからだ。何事にもプラス思考の正幸理事長は、立地が悪くても、患者に信頼される歯科医院にするにはどうしたらいいかを考え抜いた。

開業5年目に歯科診断ソフトの独自開発に取り組んだのも、その現れだ。このソフトは、検査データを一元化し、患者にも一目でわかるようにイラスト化した診断書として出力できるというもの。パソコンが普及し始めた時代に、視点も発想も画期的なソフトだった。

「患者さんは自分の口腔内の状態や痛みの原因を十分に理解しないまま、治療を受けています。歯科の基本知識がない患者さんにすれば、レントゲン写真や模型で説明されても、よくわかりません。医療の主役は患者さんです。患者さんがわかる形で情報を提供し、共に治療に取り組むシステムを作らなければ、医療は変わらないと考えたのです」（正幸理事長）

わかりやすい医療情報の提供と丁寧な診療は、口コミで評判を呼び、原歯科の患者数は年々、増加。1997年には患者増に対応するため、現在地に移転新築した。

移転時には歯科医師もスタッフも増え、そのまとめ役は、歯科衛生士兼受付であり、原歯科の経営全般を担当する奥様のみゆきさんだ。そして、2017年には長男の幸弘先生が勤務医として加わった。2020年からは院長職を幸弘先生に託し、正幸先生は理事長に就任。2022年には次男の法正先生も勤務するようになり、いまや家族全員で原歯科を支えている。

「患者第一主義」をモットーとする姿勢は、今も変わらない。そして、正幸理事長はこう力説する。

「経営が成功するか否かではなく、医療人として何をするべきなのか、何が患者さんの健康につながるのかを考え、実践することが、私の原点です」（正幸理事長）

健康と幸せを提供する新たな取り組みに挑戦

現在、正幸理事長が追求しているのは「幸福歯科」だ。「幸福歯科」とは、歯の治療と予防だけでなく、美容面や全身の健康も含めて、患者の幸せをサポートする

広々とした円形の待合室と受付

医療の取り組みを指す。

なぜ健康と幸福を両輪にした歯科を目指すようになったのだろう。それを探るヒントは、原歯科がいち早くインプラントと予防歯科に取り組んできたことにある。

正幸理事長は「総義歯の選択肢しかない患者さんを救いたい」と、1990年からスウェーデンに赴き、インプラント治療を学んだ。当時の日本では、インプラントに懐疑的な意見もあった頃だ。

そして、正幸理事長は自身が学ぶだけでなく、日本に普及させるため、1998年に教育研究機関として、スウェーデンの専門医と連携し、「O.S.I（オッセオ・スカルプ・インスティテュート）」を設立。以来、数多くの歯科医師を育ててきた。

予防歯科にも力を入れ、その実績は、長久手市が80歳、85歳、90歳で20本以上の歯を保っている高齢者を表彰する人数にも現れている。原歯科では毎年、10名以上の患者が表彰されているという。

「表彰を受けた患者さんは、40～50代から原歯科で予防管理をしている方たちです。歯科診断ソフトを活用し、ご自身の口腔内の状態を理解していただくことで、自宅でのしっかりした管理ができていること、定期健診のときに保険診療のルールに則り、3回にわけて全部の歯を丁寧にクリーニングしていることが、歯を残すことに役立っています」（正幸理事長）

こうしたエビデンスに基づいた治療と予防を徹底してきたことが、次のステップとして、医療を通じた患者の幸せに目を向けることにつながった。

「健康な体は生きていくための基礎部分でしかありません。健康でも幸せでなければ、生きる価値は半減するでしょう。多くの医療施設、とくに歯科医院は、患者さんにとって一番、行きたくない場所だと思います。だからこそ、歯科医院に行くことで健康になり、幸せも感じられる空間や体験を私たちは提供しなければならないと考えるようになったのです」（正幸理事長）

そのために取り組んでいるのが、美容や食の専門家との連携だ。歯科の枠を超え、他分野の知識も集積した情報はSNSで発信している。また、名古屋市内に「幸福歯科」のデンタルエステが受けられる施設も設けた。

「幸福歯科」の特徴は、インプラントの普及に取り組ん

オープンスタイルの診療室。9台のチェアがカーブした奥の右側にも並ぶ。

だときと同様に、デンタルエステを学ぶ教育研修を整えていることだ。認定制度も設け、正しい知識と技術を持つ歯科医院だけがデンタルエステを行える。新しい分野の普及には、エビデンスのある教育に基づいた知識と技術を広めることが重要と考えているのだ。

「患者さんにとって必要なこと、幸せになることを考え、実践することは歯科医師の責務だと思います。時間はかかるかもしれませんが、改革し、継続する人がいないと医療は進歩せず、世の中は変わりません。『幸福歯科』もその信念で進めているのです」（正幸理事長）

歯科医院の継承を支える親子の強い絆

原歯科では、父の正幸理事長から息子の幸弘院長への親子継承も進んでいる。幸弘院長は、跡を継いだことを、どのように感じているのだろうか。

「高校時代は歯科医師になることに迷いがありました。自分にはできないと思い込んでいたのです。でも、父と話すうちに、次第に自分でもできるかもしれない、という気持ちが生まれてきました。折々に励ましてくれる父の言葉に背中を押してもらったのです」（幸弘院長）

歯科大学に入学後は、夏休みなどに原歯科でアルバイトをしながら勉強を重ねていった。現場で働く父の姿を間近で見ることで、知識と技術の深さ、医療人としての姿勢をより理解できるようになり、尊敬の念が深まった。この時期に自身の歯科医師としての価値観も固まったという。

「私はわからないことは、とことん突きつめたいタイプ。大学の授業や実習で腑に落ちないことがあると父に聞き、その答えに納得したりしていました。そうしたやり取りのなかで、ベテランの歯科医師と歯科医師の卵としての関係が築かれ、自然と原歯科を受け継ぐ土台ができあがったと思います」（幸弘院長）

じつは幸弘院長が継ぐのは、もう少し先になるはずだった。正幸理事長の強い勧めもあり、研修後はスウェーデンに留学する予定だった。しかし、思わぬことが起きる。

「自分では治療が必要なほど悪化しているとは気づか

インプラント治療も行われるオペ室

なかったのですが、うつ病になっていたのです。よい精神科の先生に巡り会い、1年足らずで回復しましたが、このことがきっかけで留学はせず、原歯科に勤務することになりました」（幸弘院長）

この頃は、正幸理事長にもつらい時期となった。息子にスウェーデンで世界水準の教育を受けさせたい、という夢は潰えた。しかし、自分よりさらに高みを目指す歯科医師になってもらいたいという未来には影響しなかった。

「私自身も悩みましたが、よりよい歯科医療を追求し、情報発信ができる歯科医師になって欲しいという願いは変わりません。であれば、原歯科で徹底的にトレーニングすればよい。そう気持ちを切り替えました。最近は院内でアドバイスするだけでなく、若手の歯科医師が日々、もがきながら成長する過程を発信することが、他の歯科医師の励みにもなるのではないかと考え、医療出版社のホームページでの動画配信を勧めるなど、さまざまな形で息子を支えています」（正幸理事長）

親子で継承する場合、治療法や患者への対応で意見が食い違うという話もある。しかし、幸弘院長は、原歯科には、そうした世代間のギャップはないと言う。

「学術は日進月歩ですし、僕たちも日々、勉強しなければなりませんが、新しい技術が将来も残っているとは限りません。確実に患者さんのためになるものだけが残っていきます。その集約した知識と技術を持っているのが、父だと思っています。原歯科の治療成績がエビデンスとして、カルテに記録されているからです。父は今も貪欲に最新情報を収集し、たゆまず勉強を続けています。僕にとっては、誰よりも尊敬できる歯科医師なのです」（幸弘院長）

兄弟で新しい歯科医院の経営に踏み出す

原歯科では、長男の幸弘院長と次男の法正先生が中心になりつつあること、今の場所が借地でいずれ出ていく必要があることから、現在地に近い場所に新しい医院を建てる計画が進んでいる。

「具体的なデザインや設計は模索中です。歯科医院のイメージが一掃されるような新しさがあり、一人ひとり

波形にデザインされた受付

院内に飾られている家族の名前が入った造型作品

の患者さんにホスピタリティを感じてもらえるような、気持ちのいい場所にしたいと思っています」（幸弘院長）

歯科医院の経営には、兄弟が力を合わせて臨む予定だ。これには正幸理事長の下で学んだ2人の歯科医療に対する考え方が一致していることが大きい。また、兄弟の絆が強く、とくに弟の法正先生が兄と力を合わせていきたいという思いが強かったこともある。

そこで、法正先生に幸弘院長と歯科医院の経営に乗り出す思いを聞いてみた。

「医院に一歩入ると、兄と僕は院長と勤務医の関係に一瞬で切り替わります。兄の表情が引き締まり、声をかけるときもプライベートとは違う緊張感があります。それだけ兄が院長の責務を自覚して仕事をしているのだと思います。そんな兄を支えながら、新しい歯科医院は、『長久手だったら原歯科だよね、息子の代になってもすごいよね』と言われる存在にしていきたいです」（法正先生）

幸弘院長も新しい歯科医院では、父が築いてきた患者からの信頼をさらに高め、矯正歯科やマイクロスコープによる治療など、これまで手がけてこなかった分野にもチャレンジしていきたいと話す。

「一生懸命に生きて、患者さんに全力を尽くしていけば、将来、振り返ったときに自分の成長を実感し、こんな姿は想像していなかったな、という存在になれると思います。父から学んだことを大切にしながら、原歯科の未来をよりよい形に発展させていきたいです」（幸弘院長）

原正幸理事長（前列中央左）と奥様のみゆきさん（前列左）と
原幸弘院長（前列中央右）と原法正先生（前列右）、スタッフのみなさん

PROFILE

原 正幸 先生
●1976年　明海大学歯学部卒業　●1979年　原歯科開業　●1997年　現在地に移転新築
●1998年　「O.S.I（オッセオ・スカルプ・インスティテュート）」設立　●歯学博士　●顎咬合学会認定医・指導医

原 幸弘 先生
●2016年　愛知学院大学歯学部卒業　●2017年　原歯科に勤務　●2020年　原歯科院長に就任
●顎咬合学会認定医

医療法人志萠会 原歯科　愛知県長久手市横道2203　TEL：0561-62-4181　HP：https://hara-dental.com/

尾形歯科医院

建物のイメージに合わせた
木製の看板が目印

山小屋風の家庭的な雰囲気の外観。右側に入り口がある

歯を残す丁寧な治療と訪問診療に取り組み、家族の絆で患者の健康を守る

鹿児島県薩摩郡にある「尾形歯科医院」は、歯科医師の父と娘、歯科衛生士の母のチームワークで地域住民の歯を守っている。その歩みとこれからを伺ってみた。

尾形歯科医院　院長　尾形 文隆 先生
副院長　尾形 晴香 先生

虫歯の撲滅に尽力し、家族と歩んだ35年間

「尾形歯科医院」は、鹿児島県の中央に位置する山あいのさつま町にある。取材陣を温かく迎えてくださったのは、尾形文隆院長と長女の晴香副院長、文隆院長の奥様で歯科衛生士の由美子さんの3人。仲の良い親子のやり取りを伺いながらの、にぎやかな取材となった。

文隆院長が岐阜歯科大学(現朝日大学歯学部)を卒業し、勤務医を経て、故郷に戻ったのは、1988年のこと。歯科医師の父の跡を継ぐ2代目としての開業だった。

当時は現在地から50mほど離れた場所にあり、今よりもチェア数は少なく、外観も普通の住宅に近かった。「以前の歯科医院では、虫歯の治療がほとんどで忙しかったです。無医地区だった隣村にも通いました。とくに地域で一番、困っていたのが子どもの虫歯です。染め出しやブラッシングの個人指導をしても、なかなか減りません。そこで、全国的に普及が始まりつつあったフッ化物洗口に養護の先生と一緒に取り組んだら、劇的に減ったのです。始めて10年ほど経った頃、養護の先生から、小学6年生のDMFTがゼロになったと聞かされたときは驚きました。印象深い思い出です」(文隆院長)

現在地に移転新築したのは、2017年になる。駐車場が手狭になり、新しく場所を借りようと考えていたとき、すぐ近くの土地が売りに出ていた。当時の医院が玄関まで階段を上る必要があり、重い扉が開けにくいなど、高齢の患者に負担をかける構造だったこと、いずれ晴香副院長が跡を継ぎ、新しく歯科医院を建てることも考え、思い切って購入したという。

新築した歯科医院には、尾形家全員の想いが息づいている。文隆院長には晴香副院長の他に2人の娘がいる。次女は矯正歯科を担当し、三女は建築士だ。由美子さんも含めてどんな歯科医院にするか、全員がアイデアを出し合った。

大きな窓が印象的な山小屋風の院内に入ると、バリアフリーの待合室、診療室のどちらにも木が多用され、広々とした空間が心地よい。自然光が柔らかく差し込み、一般住宅のリビングのような雰囲気だ。

待合室は、靴下や裸足で歩けるようにし、診療室に入るときにスリッパを履くようにしたのは、子どもやお年寄りが動きやすく、患者にくつろいで欲しいという由美子さんの考えから。晴香副院長は、医療施設として、清潔度とくつろぎ感のどちらを優先するか迷ったが、親しみやす

広々とした仕切りが低いオープンな雰囲気の診療室

さが好まれる地域性を考え、母の提案を受け入れた。

待合室の吹き抜けから見える2階の通路は、小さなギャラリーになっており、絵が好きな文隆院長が季節の変化に合わせ、こまめに絵画を掛け替えている。

「天井が高いので、建築士さんは診療に必要な明るさを確保するために苦労していましたが、患者さんには『とても気持ちがいい』と喜んでいただける院内になりました」(晴香副院長)

副院長が加わり、歯周病と根管の治療の幅が広がる

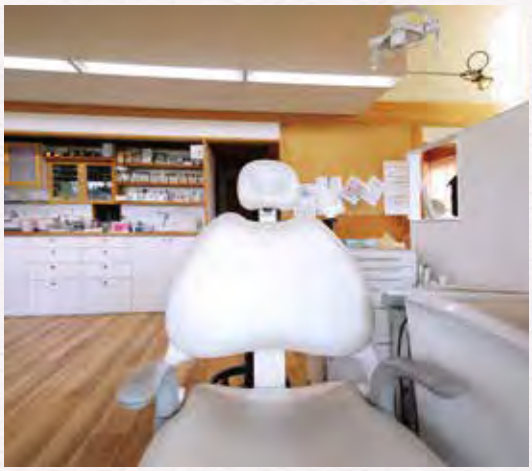
晴香副院長が尾形歯科医院で働き始めたのは、2015年から。しばらくは鹿児島大学病院歯科診療科保存科と姶良市にある歯科医院との兼務だった。

「尾形歯科医院の専任になったのは、2020年からです。大学病院と開業医の先生のもとで働いたのは、一般歯科の経験を積みたかったのと、根管治療と歯周病の勉強をしたかったからです」(晴香副院長)

父の働く姿を見て、自然と歯科医師の道を選んだという晴香副院長。尾形歯科医院の患者には、子どもや働き盛りの年代もいるが、多いのは、やはり高齢者。できるだけ長く自分の歯で食事をしてもらうためには、丁寧な根管治療と歯周病対策が鍵になる。虫歯や義歯の治療に長けた文隆院長の強みをさらに活かすために、根管治療と歯周病の勉強が必要と考えたという。

文隆院長は、マイクロスコープやNd:YAGレーザーを駆使し、1人の患者に時間をかけて、根管治療をする晴香副院長を頼もしく感じている。

「患者さんの負担を軽くしたいので、可能な限り、健康保険の範囲で治療をしています。根管治療は時間がかかりますし、私と娘の他に、もう一人勤務医がいるからできることです。収入面を考えれば、持ち出しのような状態です。それでも続けているのは、マイクロスコープやNd:YAGレーザーを使うことで、予後が大きく違うからです。重症の患者さんも娘の治療でよくなるケースが増えました。地域に愛され、患者さんを笑顔にするのが、尾形歯科医院のモットーです。娘が私の志を受け継ぎ、患者さんのために一生懸命、治療している姿を



治療中は大きな窓から外が見える。天井が高いため、明るさを確保する照明灯の位置も工夫されている

見るのは、うれしいですね」（文隆院長）

一方、晴香副院長が文隆院長にかなわないと感じるのは、患者、とくに子どもとの接し方だ。たとえば、歯を削るとき、文隆院長はラウンドバーを指し、「アンパンマンのパンチだよ」と話しかけてから治療を始める。「子どもの興味や気持ちを上手に汲んで、頑張る方向に誘導するアイデアが豊富」と晴香副院長は話す。

「他の歯科医院に勤務していたとき、父を真似て子どもに接していたら、周囲に『すごい!』と驚かれました。それを聞いて、私もあらためて父のすごさを実感したんです。義歯に対する工夫も、父は引き出しをたくさん持っています。今は、長年の診療で培った父の経験を吸収しているところです」（晴香副院長）

患者層やメインテナンスの方法が少しずつ変化

現在、尾形歯科医院に来院する1日の患者の約半数は、メインテナンスだ。歯科医院が新しくなったことに加え、晴香副院長が働き始めてから、若い世代も増えてきた。

尾形歯科医院では、担当医制を採用していない。基本的には誰が治療をしても結果が変わらないように、3人の歯科医師で情報を密に交換している。しかし、患者から「女性の先生がいい」「文隆先生に長年、診てもらっているから」と希望があれば対応している。また、義歯は文隆院長、根管治療は晴香副院長、というように、治療の内容で担当が変わることもある。

「鹿児島はジェンダーギャップもまだまだ大きい地域なので、働き始めた頃は、『男の先生がいい』と言われることがありました。でも、最近は『女の先生に診てもらいたい』と言ってくださる患者さんも増えています。長年、この場所で診療してきた両親と、そんな時代の変化を話すこともあります」（晴香副院長）

尾形歯科医院には、歯科衛生士が由美子さんを含めて4人、歯科助手が3人いる。

晴香副院長が診療に加わってから、メインテナンスもそれまで以上にきめ細かく対応するようになった。メインテナンスで通院する間隔は1か月に1回のペースを

準備スペースも木の棚を配置するなど、デザインを統一

基本にしている。丁寧なクリーニングだけでなく、ブラッシング指導も熱心に行っている。

「以前は3か月に1回でした。間隔を短くしたいと提案したら、父はすぐに賛成してくれました。治療に対する新しい考えも柔軟に受け入れてくれるので、私も相談しやすいです」(晴香副院長)

地域に欠かせない訪問診療の拠点にも

尾形歯科医院のもう一つの特徴は、介護保険制度が始まる前から訪問診療に取り組んできたことだ。中心的存在の由美子さんは、訪問診療のエキスパートとして、講演や歯科情報誌の執筆もしている。

取り組むきっかけになったのは、幼い頃に晴香副院長が抱えていた病気だ。肺の病気で長く闘病していた。症状は重く、医師に「症状がこれ以上、広がった場合は死も覚悟して欲しい」と言われるほどだった。

原因が一向にわからないため、福岡市の病院に転院することになった。由美子さんは下の娘たちも連れて、晴香副院長に付き添った。

「大きい病院だったので、晴香は看護師さんに手厚く看護されていました。下の娘たちも、私の負担を気づかって、病院の保育園が預かってくれたんです。そうすると、私は昼間、一人になる時間ができてしまいました。晴香が死ぬかもしれない、と主治医に言われて以来、死について考えることも増えてしまって……。柳田邦男さんの本を読んだりするうちに、ホスピスに興味を持つようになったんです」(由美子さん)

ある日、由美子さんは、歯科衛生士を対象にしたホスピス研修の告知を歯科情報誌で見つけた。すぐに応募し、事前研修を受け、ホスピスでの口腔ケアに臨んだ。しかし、短期間の勉強でできるほど甘い世界ではなかった。

「足を踏み入れたのはいいけれど、勉強不足のことばかり。せめて口腔ケアだけでもきちんとできるようになりたい、と思いました。鹿児島に戻ってから、介護ヘルパーさんに紹介してもらい、自宅で寝たきりのお年寄りの口腔ケアに出向くようになりました」(由美子さん)

幸い晴香副院長は、副鼻腔気管支症候群と診断がつき、治療で劇的に回復。すっかり元気になった。

気持ちと時間の余裕ができた由美子さんは、口腔機能の勉強をやり直し、知識と技術を深めた。訪問診療でなによりも驚いたのが、口腔ケアをすればするほど、高齢者が元気になっていくことだった。歩けるようになり、一人で入浴できるようになった人もいる。由美子さんは、いつしか訪問診療の分野で頼られる存在となっていった。

現在は、近隣の総合病院にある歯科が訪問診療を

待合室にいる患者を和ませる2階のミニギャラリー

文隆院長の奥様で
歯科衛生士の由美子さん

手がけるなど、担う施設が増えたため、尾形歯科医院が定期的に訪問するのは2軒の介護施設。病院や個人から依頼されたときに訪問することもある。

由美子さんの頑張りに刺激され、文隆院長は「訪問診療で、かなり遠いところにも行かされた」と笑う。そして、こうも話す。

「歯科医師は歯だけ診てしまいがちです。でも、虫歯や歯周病などの病気だけでなく、食べ物が噛めるか、うまく飲み込めるかといった機能面に気を配るのも、仕事の範疇だと思います。歯科医師の口腔ケアが当たり前になり、口腔医と呼ばれるような世の中になって欲しいです」（文隆院長）

晴香副院長が本格的に尾形歯科医院の診療に加わって3年になる。しばらくは親子での診療が続くが、代替わりの準備も始めている。晴香副院長は、歯科医院をどのように成長させていきたいと考えているのだろう。

「省力化のため、デジタル機器やIT技術を導入するなどの変化はあるでしょうが、診療に向き合う気持ちは今と変わらないと思います。『尾形歯科医院に行ったら、自分の歯が残せる、自分の歯が長持ちする』と患者さんに言われる歯医者さんでありたいです。そのためには、歯周病対策と根管治療にしっかり取り組むことです。これからも父が大切にしてきたものを受け継ぎ、地域に信頼される歯科医院であり続けたいと思っています」（晴香副院長）

尾形文隆院長（前列中央）と尾形晴香副院長（前列左）、
奥様の尾形由美子さん（前列右）、スタッフのみなさん

PROFILE

尾形 文隆 先生

●1984年　岐阜歯科大学（現朝日大学歯学部）卒業　●1988年　勤務医を経て、尾形歯科医院を開業
●2017年　移転新築

尾形 晴香 先生

●2013年　明海大学歯学部卒業。鹿児島大学病院に研修医として勤務　●2014年　一般歯科医院に勤務
●2015年　尾形歯科医院に勤務しながら、鹿児島大学病院歯科診療科保存科、一般歯科医院でも働く
●2018年　鹿児島大学病院歯科診療科保存科を退職　●2020年　尾形歯科医院の副院長に就任　●歯科保存学会

尾形歯科医院　鹿児島県薩摩郡さつま町宮之城屋地1462-1　TEL：0996-53-0418　HP：https://ogatadentalclinic.wixsite.com/odck

グリーンがアクセントカラーの明るい待合室と受付

診療室はプライバシーを重視した個室タイプ

マイクロスコープも活用し、夫婦で地域医療の向上に力を尽くす

北海道名寄市にある「ちば歯科医院」は地域密着型の歯科医院だ。歯科医師の夫婦が力を合わせ、地域に頼られる歯科医院として成長してきた歩みを伺ってみた。

ちば歯科医院　院長　千葉 由範 先生
副院長　千葉 順子 先生

個性と得意分野を活かした夫婦の連携による歯科運営

ひまわりのシンボルマークと淡いアイボリーの外観がアットホームな雰囲気の「ちば歯科医院」が開業したのは、2015年。名寄市に隣接する風連町出身の千葉由範院長が、父の跡を継ぐような形で開業した。

「歯科大学に入学したときから、地元に戻り、開業医になることは決めていたのですが、名寄市は人口が3万人以下の過疎が進む地域です。卒業後、そのような地域でも歯科医師を続けられるのかどうか、迷いもありました。ところが2007年、私が研修医1年目のときのことです。父が亡くなったのです。1年ほど前に見つかった胃がんは、すでに末期。想像もしなかった父との急な別れでした。使命感の強い父は、亡くなる6日前まで、弱った体と気力を振り絞り、動けなくなる極限まで診療を続けていました。私は、そんな姿を目の当たりにし、父の遺志を引き継ぐため、故郷に戻り、地域医療の向上を目指すことにしたのです」(由範院長)

ちば歯科医院は、由範院長と奥様の順子副院長で診療にあたっている。2人は2009年に結婚。長野県塩尻市にある歯科医院には共に勤務した。順子副院長は大阪府の出身だが、「2人で診療できるなら、どんな場所でも」と、由範院長の故郷に根を下すことに迷いはなかった。

スタート時のチェア数は3台だったが、すぐに1台増やし、それも手狭に。2021年12月に増築し、一気に3台のチェアを増やした。現在は歯科衛生士3人、歯科助手10人と共に多くの患者を診ている。

「じつは医院の設計や運営は、勤務医時代にお世話になった鴨居歯科医院を踏襲しています。『勤務医も院長の気構えで治療しなさい』と1人の歯科医師に1台のチェアを任せ、診療させる方針の院長先生でした。そのやり方が身についているので、私と副院長は、初診時に診たほうが担当医になり、専任スタッフがそれぞれに付く同等の立場で診療しています。ただ、お子さんは女性のほうが安心するので、副院長が担当することが多いですね」(由範院長)

また、スタッフのマネジメントは順子副院長が、院内セミナーの講師や安全管理などは由範院長が主に担当。アイデアを出し合ったり、意見を交換したり、お互いの個性と得意分野を活かした抜群のチームワークで運営している。

マイクロスコープの導入が治療精度を上げ、患者増に

ちば歯科医院の患者は、40～50代の女性を中心に、家族で通院している人が多い。90%以上が保険診療だ。

治療とメンテナンスには、6倍と10倍の拡大鏡、またはマイクロスコープを使う。とくに2018年に導入したマイクロスコープは、治療成績を格段に上げた。

「開業を決めたのも、マイクロスコープによる精密な治療

マイクロスコープは各診療室と歯科技工にも使用するため、移動しやすい位置に

各診療室個室には患者用以外に院内を映すモニターも設置

準備スペースにも大型モニター2台を設置

をしたかったからです。自分の歯科医院で初めて手にしたので、使いこなせるかどうか、不安もありましたが、今では私が担当する全員の患者さんに使っています。また、拡大鏡もうちの診療には欠かせません。副院長は10倍の拡大鏡を主に使っていますし、歯科衛生士も拡大鏡を使ってメンテナンスをしています」(由範院長)

由範院長がマイクロスコープの勉強をするときには、同じ機種を使用する山梨県の開業医のYouTube動画を参考にした。可能ならセミナーに参加し、直接、教えを請いたいが、北海道から本州までの移動は時間がかかる。動画を見ながら、毎日、診療後に練習を続けたという。

現在は、マイクロスコープを歯科技工士に依頼する前の歯型の調整にも使用している。細部まで微調整することで、精度の高い技工物ができあがるからだ。

「ぴったりと装着できる技工物ができあがれば、患者さんの負担が少なく、治療時間も短縮できます。マイクロスコープを導入してからチェアの回転率が上がり、何よりも精密な治療を行えるようになりました」(由範院長)

毎日、遅くまで根を詰めて仕事をするため、由範院長が家族とゆっくり過ごせるのは、日曜日の午後だけだ。そんな仕事熱心な由範院長を順子副院長はこう話す。

「院長は地道にコツコツと勉強しますし、努力家です。毎晩、歯型の調整で帰宅が深夜になるので、誰もいない院内に1人でいて淋しくないかと聞いたことがあるんです。答えを聞いて笑ってしまったのですが、『技工物が友だち』と言うんです。6歳の長女も今は仕事熱心な父親を受け入れていますし、私も楽しそうに働く姿をずっと見ているので、体を壊さない範囲で好きに働いてもらうのが一番と思っています」(順子副院長)

全員が幸せになる歯科医院と地域を目指す

順調に成長するちば歯科医院だが、悩みもある。歯科衛生士の確保だ。開業時は歯科衛生士が見つからず、歯科助手だけでスタートした。現在も求人に2年に1度、応募があるくらいだという。

「歯科衛生士を増やしたいのは、地域に予防の大切さを啓蒙したいという思いがあるからです。患者さんの多くは、痛みがあってから駆け込んできます。日頃から歯科医院にメンテナンスで通うという意識がまだまだ低いのです。地域のデンタルIQを上げることが、私たちの一つの使命と考えています」(由範院長)

ピンバッジ制度

ピンバッジには、勤続年数や資格に加え、歯科衛生士を示すバッジもある

患者とスタッフを癒す待合室の愛玩用ロボットが動き回る

そのために力を入れているのが、スタッフが意欲を持って働きやすい環境づくりだ。由範院長は、スタッフと面接するときに、ちば歯科医院が掲げる3つの目的を話している。その目的とは、「歯科医療人として患者さんのために働くこと」「勤務する歯科医院のために働くこと」「自分や家族のために働くこと」の3つだ。

「勤務医時代に学んだ医療人としての目的です。私自身、働く意味が明確になったので、自分の歯科医院でも使わせてもらっています。歯科医院の主役は院長ではありません。働く全員が主役になり、みんなでアイデアを持ち寄り、盛り上がることで、地域医療に貢献できる存在になるのだと思います。院長からのトップダウンではなく、自発性を持って欲しいのです」(由範院長)

一例が患者の動向だ。予約数やキャンセル数の推移をスタッフも把握し、自分で原因を分析し、よりよい歯科医院にするための取り組みまで発案して欲しいと、由範院長は考えている。

院内の意識改革は発展途上だが、最近、うれしい変化があった。スタッフから、勤務年数と資格取得を表彰するピンバッジ制度の提案があったのだ。ひまわり型のピンバッジのシルバーは勤続3～4年、ゴールドは5年以上のスタッフに、医療事務の資格取得者には歯の形のピンバッジを授与するというもの。歯科医院からの感謝の気持ちを形にできるだけでなく、先輩のようになりたいと、スタッフの勤労意欲を刺激することにも役立つ。

「オリジナルのバッジだったので、製作所とのやり取りもスタッフが自主的に行ってくれて、大変そうでした。でも、私にはない発想でしたし、スタッフ目線の企画だったので、彼女たちからの提案がとてもうれしかったです」(由範院長)

これからの課題は、スタッフの意欲と働きを給与に反映させる人事評価の整備だ。今以上に魅力的な職場を作ることができれば、歯科衛生士の応募も増えるという期待がある。

「学校医も担当しているので、学生の皆さんに歯科衛生士という仕事があることや、仕事の魅力を伝えていきたいとも思っています。私と副院長の目標は、歯科医療を通じて地域貢献をすることです。ちば歯科医院に通う患者さんと働くスタッフ全員に幸せを感じてもらいたい。そのためにこれからも努力を続けていきたいと思っています」(由範院長)

千葉由範院長(中央左)と千葉順子副院長(中央右)、スタッフのみなさん

PROFILE

千葉 由範 先生
●2006年　松本歯科大学卒業。同大大学院に入学し、在学中は松本歯科大学病院の歯周病科で研修医、その後、補綴科に勤務　●2011年　松本歯科大学大学院修了。鴨居歯科医院勤務　●2015年　ちば歯科医院開業

千葉 順子 先生
●2004年　松本歯科大学卒業　●2006年　松本歯科大学病院勤務　●2010年　鴨居歯科医院勤務　●2015年　ちば歯科医院開業

ちば歯科医院　北海道名寄市西4条南5-27　TEL:01654-9-4182　HP:https://chibadcnayoro.com/

祖父が持つ材木店の倉庫を歯科医院にリニューアル

ナチュラルな雰囲気の受付と待合室

待合室の奥にはキッズスペースを用意

人の縁を大切に マウスピースやレーザーを 治療に駆使

神奈川県横浜市にある「ひのき歯科」は、開業6年目。
新患の7割以上が紹介という歯科医院だ。
立地の悪さを克服し、成長してきた歩みを伺ってみた。

医療法人ひのき歯科　理事長 内田 宏城 先生

診療への厚い信頼感が恵まれない立地を克服

「ひのき歯科」があるのは、相鉄線平沼橋駅の近く。横浜駅からも歩いていける地域にある。しかし、内田宏城理事長は、「歯科医院の場所として、立地には恵まれていない」と話す。

ひのき歯科の前には相鉄線の線路が通り、建物の背面には帷子川が流れ、道路が入り組んだ地域にある。メインストリートから離れているため、人通りが少ない。近隣住民が歯科医院の存在に気づきにくい場所だった。

それでも開業を決めたのは、内田理事長の祖父が創業した材木店があった場所だったからだ。

内田理事長は岡山大学歯学部を卒業後、勤務医になり、開業前の10年間は分院長として働いていた。その歯科医院を買い取り、独立する予定だったが、諸事情から話が立ち消えになった。急きょ、自力で開業準備をすることになったが、候補地が見つからない。悩んだ末に思いついたのが、祖父の材木店があった今の場所だった。

「裸一貫で祖父が材木商を起こした場所で、9階建ての建物は、建築士だった父が建てたものです。倉庫として使っていた1階が空いていたので、ここで開業しようと思ったのです。開業をサポートしてくれた方たちには、立地の悪さから反対されましたが、祖父と父が大切にしてきた場所を継ぐのは自分しかいないと考えました」

誠実に正しい治療を地道に続ければ、自然と患者は増えてくる。勤務医時代、10年間の分院長を続けるなかで右肩上がりに結果を残してきた経験から、「他とは違う、自分にしかできない治療を行うことができれば、この場所が最適な立地となる」と思ったという。

「上の階には自宅があり、職住近接で家族との時間も過ごしやすい。今となっては、祖父、父から継いだこの場所を選んでよかったと思っています」

材木店の倉庫を歯科医院に改装するにあたり、内田理事長が力を入れた点の一つは、子どもが好きなこともあり、多くの子どもに来院して欲しいと、待合室にキッズスペースを設けたことだ。もう一つは、内装に自然木風の建材を多用し、アットホームな雰囲気にしたこと。さらに、薬剤のにおいがしないように使用する薬剤と空調にも配慮した。

「歯科医院名にひのきの名前をつけたのも、もともと建物の名前がひのき館だったことと、材木店があったことを残したかったからです」

開業時のチェアは3台。患者の来院数に不安を抱えての開業だったが、フタを開けてみれば杞憂だった。1年以内にもう1台、チェアを増やさなければならないほど、順調に患者は増えていった。

咬合調整とマウスピースを用いて体の不調も和らげる

ひのき歯科の患者は開業当初、ほとんどが近隣以外から訪れていた。その理由は「ひのき歯科でなければ」と信頼し、通院しているからだ。

診療室の中央には大黒柱をイメージした仕切りを配置

個室タイプも用意している

動線を確保した広い診療室

たとえば、分院長をしていた頃の患者が、1時間以上かけて来院してくれたこともあった。辞めるとき、自身の歯科医院を持つことを伝えてはいなかったが、インターネットで名前を検索するなどして来院した人も多かった。内田理事長の腕と人間性を信頼しての通院だった。

もう一つの大きな理由が、マウスピースを使っての咬合治療だ。ひのき歯科では、就寝中に装着するマウスピースを噛み合わせの調整に使っている。内田理事長の経験から生まれた調整法により、「頭痛や不眠が楽になった」と評判を呼び、口コミで患者が増えていった。

「就寝中に強く噛みしめて、歯や歯周組織を無症状のまま悪くしている人が本当に多いんです。ほうっておくと歯がますます削られていきます。マウスピースを装着して眠ると、歯が守られるだけでなく、頭痛や不眠、途中覚醒などの不調が和らぐんです」

内田理事長がマウスピースに注目したきっかけは、歯科医師である弟の偏頭痛だった。頭痛薬を手放せない姿を見て、なんとかしたいと咬合調整と就寝時のマウスピースの着用を勧め、調整を続けたところ、症状が大きく改善した。その後、同様の悩みを抱える親族にマウスピースを装着してもらうなかで、不眠や頭痛への効果を確信。患者にも装着を勧めるようになっていった。今では、医師や歯科の関連企業で働く人など、医療従事者も不眠や頭痛の改善を期待して来院しているという。

「20年間、睡眠導入剤を欠かせなかった患者さんがマウスピースを使用して1か月ほどで、薬を服用しなくても、よく眠れるようになったケースもありました。0.数㎜単位の微妙な調整なんですが、マウスピース治療の効果は驚くほどです。患者さんが長年、抱えていた悩みが解消していくのを見るのは、歯科医師として本当にうれしいです。ただ、今は15年に渡る自分の経験から施術し、自分のなかでエビデンスを確立しつつある状態です。これらの技術と知識をいかに広め、悩める人々をどう救えるかを模索しているところです」

CT、レーザー、マイクロスコープの三位一体で歯を守る

ひのき歯科が大切にするのは、とことんまで歯を保存する治療だ。マウスピースの活用以外にも、CTとNd:YAGレ

CT、Nd：YAGレーザー、マイクロスコープを用いて「行田メソッド」を確実に行うようにしている

ーザー、マイクロスコープが頼れる存在になっている。

「とくにNd：YAGレーザーの、導入前は懐疑的でした。レーザーは目に見えません。一部の特別な先生が使うものと思っていたのです。しかし、行田克則先生をはじめ、Nd：YAGレーザーの症例から学び、実際の治療で試してみたとき、抜歯するしかない状態だった歯を残せることに驚きました。無痛下で治療できるのもメリットです。今、うちの歯科医院には月に600人の患者さんが来院されていますが、年間で抜歯が10本もないのは、Nd：YAGレーザーがあればこそです」

開業から5年経ち、スタッフも歯科衛生士が1人から4人に増えた。「自分の目が届く範囲で責任を持って治療したい」と考える内田理事長は、今以上に歯科医院を拡張する考えはない。

そして、何度も口にするのが、人の縁のありがたさだ。大学の歯学部で学んでいるときから、内田理事長は教授や先輩に導かれ、歯周病や小児歯科、口腔外科の知識を深めてきた。大学時代、ボランティアとしてベトナムに赴き、孤児の歯科治療に当たったことも、貴重な経験になった。

今も遠方から時間をかけて来院する患者、自分の大切な人を紹介してくれる患者、定期的に通院してくれる患者に感謝する毎日だ。

「うちの歯科医院は、優秀なスタッフも自慢です。リーダーの歯科衛生士は、私が以前、勤めていた歯科医院の同僚でした。開業するときに、一緒に働きたいと言ってくれたのです」

内田理事長は、その歯科衛生士に、なぜついてきてくれたのか聞いたことがある。すると、こう答えたという。

「私が陰で患者さんのことを悪く言ったことがないから、と話したんです。驚きました。歯科衛生士は歯科医師が気づかないところまで、細かく見ているんですね。彼女が私を信頼して一緒に働く気持ちになってくれたことは、開業したばかりの頃はもちろん、今も私の心の支えになっています」

学生時代からバスケットボールを続ける内田理事長は、人の温もりとチームワークの大切さをなによりも重要視している。

「私がうれしいのは、スタッフやそのご家族、うちの歯科医院とご縁ができた歯科関係者の方たちも、患者さんとして来院していることです。自分に大切な人を紹介してくれていることが私への信頼の証ですし、その輪が広がっていると実感するのです。患者さんと歯科医師の信頼関係を築くのは、1人の人間としてのつながりです。『この人に診てもらいたい』と思われるような人間力をこれからも大切にしていきたいです」

内田宏城理事長（中央）と奥様（一番左）と2人のお子様、スタッフのみなさん

PROFILE

内田 宏城 先生

●2006年、岡山大学歯学部卒業　●2008年～2017年、歯周病インプラントセンター、一般歯科医院に勤務し、分院長も務める　●2018年、ひのき歯科開業　●2023年、医療法人ひのき歯科を設立し、理事長に就任　●日本歯周病学会　●日本臨床歯周病学会　●日本レーザー歯学会

医療法人ひのき歯科　神奈川県横浜市西区西平沼町1-12 1F　TEL：045-298-6998　HP：https://www.hinokishika.com/

Nd:YAGレーザー 症例のご紹介

歯周病および根尖病巣により骨吸収、動揺が激しく、抜歯適応の歯牙に対し非外科的に歯周治療をNd:YAGレーザーを用いて行い、歯牙の保存を試みた症例

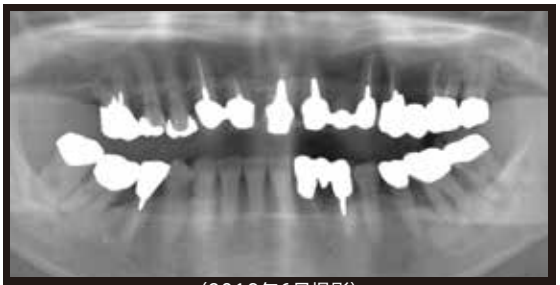
症例データ 1

患者:63歳女性

主訴　痛くて噛めない、歯がグラグラする 歯茎から血が出る、口臭が気になる

治療前の状態

全顎的に骨吸収が著しく、ほぼすべての部位から排膿と出血があり、PDが5～10mm以上、下顎前歯以外のすべての歯牙に動揺が認められた。とくに臼歯部が激しく動揺し、咬合も著しく乱れていた。27、37、36、47に根尖病巣を疑う透過像が認められた。他院で16、24、26、27、36、37、46、47は抜歯が必要と言われたが、どうしても義歯を避けたいと当院を受診した。



（2019年6月撮影）

治　療

咬合平面を整えるために、上顎はすべてプロビジョナルに、下顎臼歯部および32、33をプロビジョナルに置換した。根尖病巣の治療を24、27に行い、分岐部病変については、Nd:YAGレーザー照射(100mj20pps)による治療をした。全顎的には、Nd:YAGレーザー照射(100mj20pps)を用いて歯周治療を非外科処置にて行った。また、骨吸収の大きな要因と考えられる夜間就寝時の咬合力によるダメージは、マウスピースを用いてコントロールを行った。

現在は月に1度、ポケットの深い部位にNd:YAGレーザーを照射(100mj20pps)し、感染のコントロールを行っている。

（2021年6月撮影）

治療開始から2年以上経過するが、臼歯部の動揺がなくなり、骨吸収が回復（再生)してきているのが確認できる。エンドペリオを疑われた部位の根尖の透過像も、回復傾向にある。現状で1年以上、患者が初診時の臨床症状を訴えていないため、ファイナルに移行する時期を検討中である。骨吸収の原因である咬合力の負荷と感染のコントロールができれば、抜歯適応の歯牙も保存できる可能性を大いに感じる症例となった。

考察

二つのケースで共通しているのが、外科処置を用いずに歯周治療を行った点である。本来であれば、明らかに抜歯が必要であり、しかもオペによる抜歯を選択したい症例でも、動揺が激しい場合は、フラップ手術を伴う再生療法などの外科処置が困難なことも多い。たとえば、動揺歯が抜ける可能性が高い、不良肉芽の除去を行うとフラップを戻せない、などのケースだ。

今回、紹介したケースは、前述の要因から非外科処置で行ったが、患者の臨床症状が消失していること、痛みがなく、おいしく食事ができていることから、どちらも予後は良好のように思える。

医療法人ひのき歯科　理事長 内田 宏城 先生

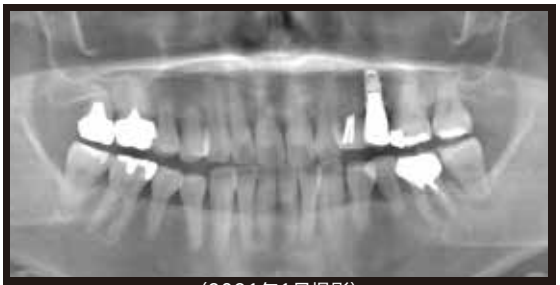
症例データ 2

患者:50歳女性

主訴　痛くて噛めない、歯がグラグラする、口臭が気になる

治療前の状態

全顎的に骨吸収、動揺が認められ、PDがすべて5～10mm以上、出血があり、排膿と臼歯部の咬耗も著しかった。17、37、47は根尖部に透過像が認められ、Perを疑わせる臨床症状があった。他院で抜歯(17、15、14、24、27、37、35、47)、および義歯作成の必要があると言われたが、義歯を避けたいと当院を受診した。



(2021年1月撮影)

治　療

歯牙の動揺、および骨吸収の大きな要因と考えられる咬合力のコントロールを行うため、マウスピースを作成し、36、37をプロビジョナルにて連結した。全顎的にPDの深い部位(インプラント部含む)に非外科処置での歯周治療としてNd:YAGレーザー照射(100mj20pps)を行った。17根尖病巣に対しては、CTを用いて部位を三次元的に把握。行田メソッドを参考に、Nd: YAGレーザー照射(100mj20pps)を行った。

(2022年7月撮影)

現在、1か月に1度、感染コントロールのため、PDの深い部位にNd:YAGレーザー照射(100mj20pps)を継続している。治療開始から1年半経過後、全顎的に動揺が治まり、臼歯部の骨が再生していることが認められる。さらに根尖病巣が疑われた17、37、47の透過像が縮小しているのが認められる。インプラント部からの排膿、および初診時の臨床症状は、一切認められていない。咬合力のコントロール、およびNd:YAGレーザー照射による感染コントロールを行うことにより、再生療法を行わず、非外科処置による骨の再生が生じる可能性を大いに感じる症例となった。

当院でも、以前であれば、初診段階で残歯が厳しいと診断し、どちらのケースも抜歯を選択していたと思うが、マウスピースによる咬合力のコントロール、およびNd:YAGレーザーを用いた感染のコントロールを行うことにより、保存不可能な歯牙を残すことができた。今まで考えていた私の抜歯基準をアップデートするきっかけになった症例である。

また、これらの症例を経験し、治療の選択肢が増えたことで、ひのき歯科では年間の抜歯件数(乳歯、親知らずをのぞく)が10本以下という成績も得ている。Nd:YAGレーザー治療を用いることで、感染のコントロールが可能になると、正しい抜歯の基準はどこに求めるべきなのだろうか。患者に寄り添う治療、QOL改善の歯科治療とはどのようなものなのか、あらためて考える必要性があるのではないだろうか。

ササキホームページでは皆様のお役に立つ情報を公開中です。

ササキ株式会社 ホームページ
SASAKI CO.,LTD.

下記から、アクセスください。

C&C ケア&コミュニケーション
CARE & COMMUNICATION

※バックナンバー掲載中

下記から、アクセスください。

歯科医院 新規開業・改装サポート
SASAKI STARTUP SUPPORT

SASAKI STARTUP SUPPORT

下記から、アクセスください。

SASAKI
https://www.sasaki-kk.co.jp

SASAKI Care & Communication Vol.60 May 2023 お問い合わせ・ご意見:『C&C』事務局 細谷俊寛
FAX 0120-566-052　https://www.sasaki-kk.co.jp
発行:ササキ株式会社　東京都文京区本郷3-26-4 ササキビル4F
●本誌に記載された個人の氏名・住所・電話番号等の個人情報の悪用を禁じます。●本誌の記事・写真・図版等を無断で転載・複製することを禁じます。

SIAA ISO 22196 抗菌加工
無機抗菌剤・印刷
印刷面
JP0122545A0002N